



LUCID

透明人間

そう、あの包帯ぐるぐる巻いて、それをとると誰にもみえない人。僕は実は、自分が透明人間じゃないのになって思っているんだ。本当さ。僕の場合、違うのは僕自身じゃなく、まわりの世界が透明になる事なんだ。道なんか歩いているとね時々まわりの景色が、ふーっと消えて行くことがあるんだ。小さい頃からずっとね。ただ見えなくなってもでもどこに何があるのかはちゃんとわかってる。普通に生活しているときと同じようにね。でもやっぱり、透明な世界は、なにかが違うのさ。そのせいか。道にはよく迷う。帰り道がわからなくなる事がしょっちゅうで、わかりきった道でも知らないところに来たみたいに迷うんだ。それは困るよ、全く。自分の家に帰りつかないってのはね。

不自由と言えばそれくらいだったんだけど、つい、この間偶然わかったのは、僕から透明に見えてるときは、まわりから僕のことが見えないって事なんだ。理屈からすれば実際ありうる事なんだ。何故今まで気づかなかったのかな。最近、その世界に慣れてとんとん透明なものが読み取れるようになってきた。それに、もともと透明だからどうにでも自由に読み取れるわけで、とうとう僕はその世界を好きなように作り上げることができるようにまでなって・・・そんなとき、ふいにTくんが僕の世界にあらわれてね。驚いたよ。そういう事はありえないはずなんだから。もちろんTくんは透明なんだけど、僕にはっきり解るのは実体がそこに在るってことさ。僕が『こんにちわ』って声をかけたのにTくんはびっくりしてまわりを見渡すんだけど、どうしても僕のことが見えなかったみたい。そのうち首をかしげながら通り過ぎていった。それで、思ったんだ。今までまわりが透明なんだとばかり思っていたけれど、

本当は透明だったのは僕自身だったんじゃないかって。

とすると、僕はその長い間、いったいどこに居たんだろう。

それより、いま僕は本当に、ここに居るのかな。ね？

いま僕のことちゃんと見てる？

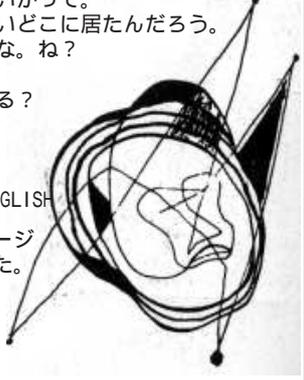
ちゃんと僕の体が見えてる？

internet

JAPANESE & ENGLISH

ミルクホールタイムスはミルクホールのホームページでご覧になれます。また新しく英語版も加えました。どうぞ、ご利用下さい。

<http://www.milkhall.co.jp/>



COLUMN

キティホーク号へ

12月の冷たい雨の中、私たちミルクホールの蚤の市メンバー一同は横須賀のコーヒーショップに集合し、横須賀米軍基地へと向かった。早々に集合したにもかかわらず、午後2時ゲート前の約束に15分を過ぎていた。

3ヶ月ほど前、ミルクホールの骨董市に何度か顔を出していた、横須賀基地に勤務する ロールマンさんが、はじめて青空市に訪れた時、彼はとてもこのガラタ市を気に入ってあちらこちら歩き回り倉庫の奥のほうから、なんだかほこりだらけのものを捜し出しては、これはなんだろう？と不思議がり、最後に買ったのは昔の蔵戸。大きくて鉄の金具のついた 頑丈な造りが気に入ったらしい。やっぱりこれも蔵からはずしてきたばかりというしるもので、ほこりだらけで修理前のものだ。そしてくたくのない笑顔をほころばせて『本当に、ありがと！』と言って帰っていった。翌朝、トラックで横須賀まで蔵戸を配達すると、一枚の手紙を渡された。

英語はさっぱりというメンバーばかりでなんとか解読したところによると、

『蚤の市と青空市とお礼にミルクホールの友達を、キティホーク号でのクルージングにご招待したい』キティホーク号でのクルージング!!! ああ、でっかいアメリカの空母でクルージング?!

びっくり仰天の怪情報でミルクホールを駆け回ったあげく英語を理解する数少ないパーテンダーM君の『船内をご案内すると言っているのですよ』という冷静な一言で解決した。案内できるのは5~6人までという条件下で参加するメンバーも決定し、仕事でしばらく韓国へ行くというロールマンさんの帰りを待つばかりとなった。



で、当日である。ゲート前から基地内を走り廻るバスに乗って5分程で目指すキティホーク号が目の前に現われた。身分証明書のチェックを受け全員がVISITERカードを胸につけ、ロールマンさんの『ARE YOU READY?! GO!!!』の掛け声で勢よく船内に乗り込む。彼はとても真面目な案内人。あの旗は艦長がいる印に掲げられている、これは飛行機を止めるための金具、ここは、巨大なアンカーのための部屋...

その間縫ってをさまざまな米兵たちが忙しく歩き回っている。私が一番気に入ったのは、舵取り部屋にあった、びかびかに磨いたアンティークな真鍮の舵。まだ使うこともあるそうだ。最後に皆でハーバーの見えるビザハウスで食事をして別れた。彼は、ミルクホールの蚤の市と青空市で楽しくすごせたとお礼に、自分の一番気に入った仕事と、彼の愛する仕事場である空母を私たちに案内してくれた。言葉が通じなくても、なにかを楽しむ気持ち、なにかを大切にすることが伝わった

寒空の下のあたたかい一日でした。



音音通信

過去への扉はどこにでもある。

古いものにはなんでも、昔音のお話をもっています。それが、本当の扉だとしたら？その扉は昔毎日のようにだれか知らない人の手で毎日開けられていたでしょう、いえもしかしたらあかすの扉と呼ばれ、事情があって何年も何十年も、百年以上も開けられないことのない閉ざされた扉だったかも知れない。

古いドア、真鍮の取っ手が冷やりと冷たくギーという音とともに開けば、そこは過去への入り口、ドアのむこうには...

近頃、ミルクホールの真中にドーンと居座ったでっかい箱、いや電話室と名前のつけられた大きな押入れみたいなものがあるのをご存知ですか？あれが、うちに迷い込んだ時にはさすがに皆あんぐり大口を開けて、なんでかいいんだ？どうしよう！これっていったいなんなの？で大騒ぎでした。

昔はあったんです、ああいうのが。必ずあったのが旅館の帳場の前あたりで。電話だよーって呼ぶとお客さんがトントンって、階段降りてきてボタンと戸を開けて電話室にはいるんです。後は、まあ、駅の構内、病院、お風呂屋さん(あったかなあ) たぶんミルクホールみたいなお店にはあったでしょうね。それで、ミルクホールには絶対必要だと思った業者さんが大変な思いをしてうちに持ってきたわけですよ。

電話室としては随分旅だったと思えますよ。まあせつかく来てくれたんだからああしてドンと据えたわけです。一度、ためしにあの電話室の扉を開けてみてください。

ル.....ル.....ル.....

古い電話機の、少し重くじれたい音。受話器は手にするとずしりと重く、冷たい。8...4...8...ジリジリと抵抗するように廻るダイヤル。もうそこは、見知らぬ世界への入り口です。

昭和初期 電話室 ¥52,000(格安!) 電話機 ¥8000より